

ど
じ
よ
う

今
野
和
人

三上刑事	(3 8)	∴	∴	∴	刑事
本庄刑事	(4 0)	∴	∴	∴	刑事
菅原恭太	(4 5)	∴	∴	∴	亜矢子の会社の上司
春山祥子	(2 1)	∴	∴	∴	カフェのアルバイト

○東京拘置所・外観（朝）

冬枯れの風景の中、物音一つ立てず
そびえ立つ。

「東京拘置所」の看板。

○同・ロビー（朝）

刑務官の重い扉を開ける手。

中から手にコートを持つ金塚修一
（35）が出てくる。

○同・外へ信号（朝）

コートを着た金塚が歩いている。
信号の先に土手がある。金塚は赤信
号のまま横断歩道を渡り、土手の階
段を上る。

○荒川・土手（朝）

金塚の目の前に広がる荒川。
金塚、土手を下りて野球をしてい
る少年たちの横を歩き、川に向か

う。

○同・川辺（朝）

緩慢に流れる川。金塚は手を水につけると、反射的に引っ込める。

金塚は恐る恐る手を水の中に差し入れ、手首まで水の中に入れると、「ん？」という表情をする。

水から出た手に、砂や泥が付着している。電車の走る音が金塚の背後から聞こえる。

○鉄橋（朝）

伊勢崎線が北千住方面にわたる。

○伊勢崎線・車内（朝）

金塚はドアに寄りかかり、指で髪の毛をくるくる巻きながら、外を見ている。

○タイトル『どじょう』

○練馬駅付近のATM・外観

○同・ディスプレイ

残高が90,818円と表示。

出金口から出た1万円を金塚がとる。

○練馬駅近郊のホームセンター・外観

○同・アカリウムコーナー

金塚、どじょうをじっとみつめる。

○練馬区立平成つつじ公園・ベンチ（夕）

金塚は透明のビニール袋に入ったどじょうを隣に置いて座り、肉まんをほおばっている。

金塚、肉まんの皮をちぎって小さく丸め、ビニール袋の中に入れる。ど

じょうがパクパクと口を動かす。

○練馬にある金塚の実家・外観（夜）

住宅街にある2階建ての一軒家。

どじょうが入ったビニール袋をもつた金塚が近づく。

○同・玄関外（夜）

肘でチャイムを押す金塚。数秒後ドアが開き、金塚は中にひきずりこまれるように入れられる。

○同・玄関（夜）

金塚弓子（58）、金塚をにらむ。

金塚「大げさな」

弓子「何もってんの」

金塚「どじょう」

弓子「どじょう？」

金塚「どじょう」

弓子「どじょう？」

金塚 「水槽あったよね」

弓子 「……目立たないように来てよ、せめて」

弓子の後について歩く金塚。

○同・リビング（夜）

水の入った水槽にどじょうを入れる

金塚。奥のキッチンで弓子がフライ

パンを振っている。金塚はついてい

るテレビを消す。

×

×

×

キッチンとリビングの間のカウンタ

ー上に置かれたチャーハン。

弓子 「もってって（フライパンを洗う）」

金塚が立ち上がり皿をもつ。

金塚 「夜勤？」

弓子 「お父さん？ そう」

金塚 「定年してもあるんだ」

弓子 「まあ週4だから」

金塚、席に座りチャーハンを食べ

る。

金塚 「懐かしい」

弓子 「え？」

金塚 「冷凍ごはんの感じ（ほおぼる）」

弓子 「あそう（お茶を持って席に着く）」

金塚 はチャーハンを食べ続ける。

弓子 「……明日病院ね、予約したから」

金塚 「病院」

弓子 「専門のクリニック、珍しいみたいね」

金塚 「まあそうだろうね」

弓子 「病気なんでしょ……痴漢は」

金塚 「まあ……性依存症の一種だよね」

弓子 「治して、そのあと働いて」

金塚 「もう一生分働いたよ」

弓子 「まだ35でしょ、お父さんまだ」

金塚 「公務員でしょ、川の上流じゃない」

弓子 「何いってんの？」

金塚 「上流はきれいだよ、水」

弓子 「……ニートなる気？」

金塚 「ニートはどじょう飼わないよ」

弓子 「いや、飼うでしょ（金塚笑う）。なん

でどじょう」

金塚「小学生のころ飼ってたの思い出して」

弓子「そうだったけ」

金塚「懐かしいね」

金塚「たまにしか帰ってこないのに」

金塚「……」

金塚「あんなに家早くでたがって」

金塚「うん、だから全部間違い。自立なんて

向かう先は孤独死（かきこむ）」

弓子「……この家いる以上、病院通ってもら

うから」

金塚「……（立ち上がり）ごちそうさま」

金塚、台所に行行って皿を洗い水切り

カゴに置く。弓子はテレビをつけ

る。

金塚は水槽を持ち、リビングを出

る。

○同・金塚の部屋（夜）

開けてない段ボールがいくつかあ

る。本棚には歴史に関する書籍が多い。

金塚、ちゃぶ台の上に水槽を置き、
金塚「冬眠するんだって？ 羨ましい」

金塚、ベッドに寝て明かりを消す。

○同・金塚の部屋（朝）

カーテンから日が差し込み明るい。
金塚が寝ながら大きなおならをする。

○西武池袋線・車内

乗客は少ない。金塚は座席に座り、
指で眉間を抑えている。

○坂本クリニック・外観

高層ビル群から離れ、低い建物があ
る一帯に位置している。

○坂本クリニック・待合室

金塚がソファに座り、バインダーで
とめられた分厚いチェックシートを
めくる。金塚は煩わしそうな顔で記
入していく。

坂本医師の声「仕事のストレスが原因で、依
存症になったと考えてらっしゃる」

○同・診察室

坂本医師（56）が向かいに座った

金塚を見ている。

金塚「ええ。仕事すると、痴漢したくなるん
です」

坂本「なるほど……では確認のため、ご自身
の言葉で犯してしまった罪、その事実関係
を説明してもらえますか」

金塚「（いい慣れた様子）4年前、私は山手
線に通勤で乗っていた際、目の前の女性の
臀部を偶然さわってしまいました」

坂本医師が金塚の様子を注視。

金塚「（機械的な口調で）そのとき、その女

性に怒られなかったため、許されているという誤った認識をもち、以降平均して週に一度、見知らぬ女性に痴漢を続け、昨年の6月に逮捕されました」

坂本「2度目の逮捕で、実刑1年、執行猶予半年という判決で間違いないですかね」

金塚「はい」

坂本「……まず、依存症ならばですね、原因が何であれ、自分では止められずに繰り返してしまうところに病理があるわけです」

金塚「わかります」

坂本「なので、原因だと思っっているお仕事を止めれば、おのずと行為がおさまると考えるのは危ないですね」

金塚「でも、もとは働くからしてしまうのであつて、働かなければ」

坂本「金塚さん、痴漢、性犯罪には被害者がいます。やってしまったてからでは遅い」

金塚「……」

坂本「確実に再犯を防げるよう、まずは過ち

をくり返さないようにしていきましょう」

金塚「ああ、はい」

坂本「…：電車に乗ると、気分はどうです」

金塚「落ち着かない感じはありますね」

坂本「うつや不安と併発しやすいんですよ。」

軽めの抗うつ剤を出しときましよう」

金塚「ああ、じゃあ」

坂本「毎朝1錠。あと、抗不安薬も出しときます。これは副作用で性的な衝動を抑制するので、緊急時飲んでください」

金塚「はあ」

坂本「で、診療を受けながら半年間はデイケアに集中的に通っていただき、そのあと社会復帰を目指していけたらと」

金塚「あのう、あんまり社会、戻りたいと思えないんですよね」

坂本「ええつとどうなりたい、というようなイメージありますか？」

金塚「…：どじょう？」

坂本「どじょう？」

金塚 「どじょう、飼いはじめまして」

坂本 「なんでまた」

金塚 「まあ、見てると落ち着くんで」

坂本 「落ち着くのはいいですね」

金塚 「川の下流って感じで、はい」

○ 同・待合室

受付に金塚が立ち、治療同意書にサインしている。

×

×

×

金塚はソファに座り、1週間のプログラムが書いた用紙を見る。月水金に丸がついている。

大森幸司（46）の声 「金塚さんですか」

金塚 「はい」

大森 「精神保健福祉士の大森と申します」

金塚 「（立ち上がり）金塚です」

大森 「ご案内します」

○ 同・ミーティングルーム・入り口

男たちがイスを運んでいるのを、金塚と大森が立って見ている。

大森「今からグループミーティングを行います」

金塚「はい」

大森「参加者はみな、痴漢の常習犯だった人で、ここに通いだして半年以内の方です」

佐伯太志（48）、瀬川英二（4

4）、浜口勇紀（38）、坂崎敬太

郎（28）が席に着く。

大森「最近あったことや自分の人生について話し合っています」

金塚「アルコールの会みたいなの」

大森「そうですそうです」

大森が名刺を出して金塚に渡す。

大森「ちなみに」

金塚「はい」

大森「金塚さんの過去を知っていて、危険なとき——再犯しそうなときに相談できる

方、キーパーソンと呼んでいるんですが、

誰かいますか？」

金塚「いえ」

大森「では、僕がキーパーソンになるので緊急時はその番号（名刺指す）に電話してください」

金塚「はあ」

名刺をもつ金塚の手。

○同・車座

6人の男たちが座る。

大森「新しく入った金塚さんです」

金塚「金塚です」

参加者たち「（口々に）こんにちは」

大森「こちらから佐伯さん、浜口さん、瀬川さん、坂崎さんです」

参加者と金塚は会釈しあう。

大森「じゃあ、最初に話したい人います」

佐伯「（手を挙げ）いいですか。こないだ、久しぶりに妻と2人、外食したんですよ。酒も自分がいるからって、許してくれて」

浜口「いいなあ」

佐伯「（金塚に）わたし、CMとか出てる飲料メーカーの会社で開発やってたんですけどね、子どもの話、仕事の話、いろんな話しました。その流れで『忙しすぎたのよね』って妻が言ってくれて」

瀬川「それ、許してくれたんですか？」

佐伯「うれしくてね。帰ってからは、今まで言えなかった分、伝えなきゃと思って『ありがとう』と言って、抱きしめたんですが：それ以上は、拒絶されちゃって」

浜口「まあ、そりゃね」

大森「わたしが知る限り、捕まったあともセックスできる夫婦はいないですね」

佐伯「でも、夫婦だからいつか」

坂崎「忙しすぎたのよねって、許してるんじゃないんじゃないですか」

佐伯「え？」

坂崎「あきらめて、自分に言い聞かせてる感じ」

佐伯「そうなの？」

大森「金塚さんはどう思います」

金塚「特になにも」

大森「じゃあ……次話したい人います？」

金塚以外の3人が手をあげる。

×

×

×

西日が差し込んでいる。

男たちがイスをもって片付けてい

く。疲れた顔の金塚に大森が近づ

き、

大森「お疲れ様でした」

金塚「どうも」

大森「封筒の中にリスクマネジメントシート

という用紙があると思うんですけど」

金塚が封筒の中から「リスクマネジ

メントシート」という用紙を出す。

大森「それですそれです。それを宿題として

書いてきてください」

金塚「はい」

大森「では、明後日に」

金塚がコートを手取る。

○薬局・外観（夕）

処方箋を持つ手。

金塚は混んでいる店の中を見ると、ポケットに処方箋を入れて立ち去る。

○本屋（夕）

人文学の専門書のコーナーを立ち読みする金塚。読んでいた本の背表紙を見ると、「本体2000円＋税」とあり、平積みに戻す。

○路地く名画座前（夜）

金塚、左右の風俗店や飲食店を横目に見ながら歩き、スマホをつけると18時15分と表示される。

金塚が名画座の外に掲示してある番組表を見ると、次の映画の開始時刻

は19時。

○路地（夜）

ガラガラと派手な個室ビデオ店を横目で見ながら歩く金塚。

○池袋駅・駅前（夜）

群衆が右往左往している。あちこちであがる白い息。

○同・西武池袋線改札（夜）

雑踏の中を金塚が歩いている。

○同・ホーム（夜）

乗り場に並ぶ長蛇の列。
漂うように歩く金塚。金塚は何人も女性の後ろ姿を目で追い、眉間を抑えたり、髪の毛を指でくるくると巻いたりして歩き続ける。

金塚、前を歩くグレーのコートを着た小柄の志田亜矢子（30）の後ろ姿を見ると、吸い込まれるように近づく。亜矢子が列に並ぶと、金塚はその後ろに並ぶ。亜矢子はスマホを見ている。

金塚は顔を伏せている。

○同・車内（夜）

満員の車内。金塚は亜矢子に後ろに立っている。金塚は網棚上の広告辺りに顔を向け、左手でつり革をもち、右手は自身の右足の太腿に爪を立てている。すつと、金塚の右手が太腿から離れる。

金塚が目を落とすと、金塚と亜矢子の間に腕があり、手の甲が亜矢子の臀部にふれている。金塚が手の主を目で追うと、亜矢子の右隣に立つ藤山啓介（42）の左手である。

藤山の指が亜矢子の臀部をなでている。藤山の手が亜矢子のコートの下をめくる。

金塚は眉間を指でおさえる。金塚のスマホのバイブが鳴りだす。電車が揺れる。金塚は左に寄りかかり、亜矢子の顔を一瞬見る。

亜矢子の固まって耐えている表情。

金塚は驚く。

金塚はもとの位置に戻る。金塚のスマホのバイブが鳴りやむ。

ずっと金塚は藤山の左手を掴む。藤山、意外な顔をして金塚を見て、手を振り払い車内を移動する。

金塚、両手で藤山の手を掴み、

金塚「……痴漢、痴漢！」

金塚の両手で掲げられた藤山の手が、取り押さえられた獣のように暴れる。

○練馬駅・駅員室1（夜）

金塚と離れたところに藤山が悄然と座っている。亜矢子が男性警官の堤（45）と駅員に連れられ別室に入っていく。

金塚はスマホを見て、弓子からの着信を確認する。スマホに表示された時刻は18時38分。

○同・駅員室2（夜）

堤警官が健康保険証を亜矢子に返し、

堤警官「ありがとうございます。そうですね、あの容疑者、前科はないんですが前歴はありません」

亜矢子「え」

堤警官「ま、要は前も痴漢で捕まったんですが、起訴されず済みました」

亜矢子「はあ」

堤警官「そういう人物ですが、どうしましょ

う。被害届を出すか、嚴重注意するか」

亜矢子「被害届はどういう」

堤警官「被害届は被害の申告ですね。出すと
なると署に移動してもらい、現場の再現や
調書をとるので……今からでも終電までは
かかると思います」

亜矢子、表情が陰る。

堤警官「後日、何度か来てもらうことも」

亜矢子「そうですか」

堤警官「それかこちらで説教する嚴重注意」

亜矢子「注意……」

堤警官「被害が大きくなると、強制わいせつ
罪という罰則強いものになります、話聞
く限りそこまでは」

若い警官1が入ってきて堤に、

警官1「犯人逮捕してくれた方、証言すると
言ってます」

堤警官「そう。（亜矢子に）証言、被害届
出すなら有力ですが、どうしましょう」

亜矢子「……嚴重注意で」

堤警官「了解です」

亜矢子は心ここにあらざる表情。

○同・構内（夜）

金塚は切符を通し改札を通る。金塚が数歩歩くと、

亜矢子の声「あの」

金塚は振り返る。

亜矢子「ありがとうございます（頭を下げる）」

金塚「いえ……お大事に」

亜矢子「証言すみません。被害届大変そうです」

金塚「ああ、全然」

沈黙。

金塚「じゃあ（歩き去ろうとする）」

亜矢子「なにか、お礼させてくれませんか」

金塚「いやいや」

亜矢子「助かりました。ほんとうに」

金塚「いえ」

亜矢子「すみません、お忙しければ」

金塚「暇なんですけどね」

亜矢子「なら」

金塚「いやー」

亜矢子「軽く、なにかごちそうとか」

金塚「……餃子好きですか？」

亜矢子「好きです」

ICカードを持った亜矢子の手が自

動改札機のパネルにタッチする。

金塚と亜矢子が階段を下る後ろ姿。

○練馬駅南口・信号前（夜）

金塚と亜矢子、赤信号で止まってい
る。

金塚「……金塚です」

亜矢子「志田です」

金塚「餃子、とにかく安いんですよ」

亜矢子「いいですね」

信号が青になり二人が歩き出す。

亜矢子「コンビニ、近くありますかね」

金塚「うーん、2千円あります？」

亜矢子「は、あります」

金塚「じゃ大丈夫です」

金塚と亜矢子が横断歩道を渡りきり、路地に入っていく。

○中華屋・店内（夜）

大小のテーブルが20個ほど並ぶ店内。金塚と亜矢子が向い合わせに座っている。2人のほか客は3組ほど。

おしぼりで手を拭きながらメニューを見る金塚と亜矢子。

焼き餃子（5個）が150円（税込）と書かれている。

金塚「こんな安かったか」

亜矢子「お肉、入ってるんですかね」

金塚「（笑って）多分」

×

×

×

瓶ビールとビールの入った2つのグ

ラス。

金塚「でもあれなんです」

亜矢子「はい」

金塚「トイレは汚いんですよ」

亜矢子「大丈夫です（ビールを飲む）」

沈黙。

金塚「……仕事がえりですか？」

亜矢子「はい」

金塚「……何の仕事を」

亜矢子「スマホゲームをつくってる会社でエンジニアっていうの」

金塚「ああ忙しそう（嫌そうに）」

亜矢子「月末とか、はい」

金塚「ゲーム全然やらないんですよねー」

亜矢子「わたしもプライベートでは……」

金塚「……ぼく無職なんですよ、いま」

亜矢子「あ、そうなんですか」

金塚「で、練馬の実家に戻ってます」

亜矢子「うらやましいです」

金塚「いやー、だめでしょう」

亜矢子「派遣であんま続かないので、私もちよくちよく無職になってます」

金塚「日本って大体ブラック企業ですもん

ね」

亜矢子「そうなんですか？」

金塚「自分働いてたのは、教育ですけどま

あ」

亜矢子「先生ですか」

金塚「予備校や塾で、歴史の」

亜矢子「だから、正義感あるんですね」

金塚「いや……（ビールを飲む）」

店員「（近寄り）焼き餃子です（餃子と伝票

置く）」

こんがりと焼けた大きな焼き餃子1

0個。皿に箸が伸びて餃子をつか

む。

亜矢子「（餃子を食べ）うん、あつあつで」

金塚「（餃子を食べ）うん、十分ですよね」

亜矢子「これで150円はすごい」

金塚「どうぞ（瓶ビールをもつ）」

亜矢子が両手で持つグラスにビールが注がれる。

×

×

×

残り2個になった餃子の1個を金塚の箸がとりつつ、

金塚「……休みの日はなにしてるんですか」

亜矢子「大体、ボランティアしてます」

金塚「なんの？」

亜矢子「保護猫カフェって言う」

金塚「保護猫？ カフェ？」

亜矢子「はい。捨てられた猫とか、殺処分されそうになった猫を保護してる施設で、カフェも出してるんです」

金塚「はく（餃子を食べる）。そういう世界あるんですね」

亜矢子「そこは3年くらい続けてます」

金塚「……猫って、古代のエジプトでは崇められてたらしいですけど、中世ヨーロッパでは、悪魔と結びつけられ恐れられてた……という話は聞いたことありますか？」

亜矢子「全然。なんで悪魔なんですか先生」

金塚「魔法や災いとかネガティブな象徴、イメージが猫にはからみついていた、らしいですけど……ピンとこないですか」

亜矢子「古代エジプト人と話が合いそうです」

金塚「猫、崇めていますか」

亜矢子「崇めています」

金塚「じゃ、猫の仕事メインでいいじゃないですか」

亜矢子「動物の看護師の資格はないので」

金塚「あー」

亜矢子「猫と遊びに行ってる感じですよ」

金塚「なるほどー。最後どうぞ。僕たくさん食べたし」

亜矢子「半分こしましょう」

亜矢子は新しい箸を出して餃子を割る。餃子からあふれる肉汁。

金塚「……ちなみに、被害届はその、出さなくてよかったですか」

亜矢子「もう、かわりたくないといいま
すか」

金塚「なるほど……」

亜矢子が瓶を持つ。金塚はグラスを
もち、亜矢子はビールを注ぐ。

亜矢子「すごいです、金塚さんは」

金塚「え（こぼれそうなビールをすする）」

亜矢子「（そのまま手酌し）助けられないで
す、わたし、誰も」

金塚「あ」

亜矢子のグラスから泡とビールがこ
ぼれる。

亜矢子「あー」

亜矢子はおしぼりでテーブルをふ
く。

金塚「大丈夫ですか」

亜矢子「すみません、手洗ってきます」

亜矢子がトイレに向かう後ろ姿。

金塚は自分のおしぼりでテーブルを
なんとなしにふく。金塚がポケット

に手を入れスマホを出すと、21時半過ぎ。もう片方のポケットからよれよれになった紙を出すと処方箋。

亜矢子が席に戻り、

亜矢子「トイレ、汚いですね」

金塚「でしょ！」

半分この餃子が、2方から箸に摘ままれる。

○同・外（夜）

中華屋のドアが開き、金塚と亜矢子が出てくる。

金塚「駅まで送ります」

亜矢子「あ、今日はタクシーで」

金塚「あ、そうですね」

亜矢子「安かったですし」

金塚と亜矢子は路地を歩いて抜け、赤信号で止まる。

金塚「……保護猫カフェ、行ってみたいですか」

亜矢子「え、来てくれるんですか」

金塚「見てみたいです」

亜矢子「ぜひぜひ。今月は（スマホ出す）来

週土曜と再来週入ります」

金塚「じゃあ、連絡先」

金塚と亜矢子はスマホを向けあう。

信号が青に変わる。

○金塚の自宅・玄関（夜）

金塚がドアを開け、靴を脱いでいる

と弓子がくる。

弓子「どこいったたのよ」

金塚「病院病院」

弓子「そんな遅くないでしょ」

金塚「子どもじゃないんだから」

弓子「そっちの心配じゃないでしょ」

金塚実（63）がくる。

実「いま帰ったのか」

金塚「ああ」

弓子「GPSつけたほうが」

金塚「いや、疑うと再犯つながりやすいから、やめたほうがいい」

実「おい（弓子を見て）……気持ち考えろ」

金塚、視線を弓子に合わせる。

実「ほかにいうことないの？」

金塚「ごめん」

弓子「まあ、はい」

金塚「自転車っていくらくらいかな」

弓子「自転車？」

金塚「電車は……疲れる」

弓子「ま、1万円くらい？」

金塚「おお。おやすみ」

金塚が階段をあがっていくのを弓子と実が見る。

○同・金塚の部屋（夜）

水槽の前で胡坐をかき、自分の頬やあごのひげを触る金塚。

金塚「ひげ伸びてたな」

どじょうのひげがゆらめく。

○石神井公園駅・ホーム（翌朝）

通勤者の行列のなかにイヤホンをして
いる亜矢子がいる。

電車のドアが開き、すでに混んでい
る車内に人が乗り込んでいく。

亜矢子は乗車できずドアは閉まる。

電車は発車する。

○同・亜矢子のスマホ

「体調不良のため午後から出勤しま
す」という文面。亜矢子の指が送信
を押す。

ベンチに座った亜矢子は顔をあげて
空を見る。

○金塚の家・金塚の部屋

カーテンからもれる日差し。

金塚、寝ながら大きなおならをする。

○ A T M の出金口

出された1万円を掴み、明細書をくしゃつと丸めて外に出る金塚。金塚はリュックを背負っている。

○ 自転車屋・外観

店頭の特価として出ている1万1980円の黒いママチャリ。

×

×

×

リュックをかごに入れ、自転車をこぎはじめる金塚。

○ 薬局前・外観

中から袋を持って出てきた金塚が自転車で乗ってこぎはじめる。

○ コンビニ・イトインコーナー

金塚の自転車がガラス戸の向こうに止めてある。
コンビニのコーヒーをすすりながら、リスクマネジメントシートに向かう金塚。

○キーボードを打つ亜矢子の手（夜）

亜矢子、眼鏡をかけてイヤホンをしながらパソコンを操作している。

画面下の時刻は22:10と表示。

亜矢子のいる部屋に残っている人は5人程度。

亜矢子はこめかみを指でもむ。

○坂本クリニック・外観（朝）

自転車のスタンドを止める音、かぎをしめる音。

金塚の声「一昨日なんですけど……」

○同・ミーティングルーム（朝）

車座になった男たち。

佐伯「いやー、ひやひやする話し」

大森「危険な時は必ず電話してください」

金塚「はい」

大森「振り返って、どう思ってますか」

金塚「……痴漢する人は、僕らは、おとなし

そうな、怒らなそうな人を選ぶじゃないで

すか」

一同うなづく。

金塚「そういう意味で、さわろうとした人が

犯人と一緒にだったというのは、偶然じゃな

いと思いますね。時間差でしかない」

大森「ま、分析するとそうかもしれない

が、聞きたいのは金塚さん自身の気持ちで

す」

金塚はイスに座りなおす。

金塚「気持ち」

大森「はい」

金塚「……電車に乗り込むまでは、さわるこ

とで頭がいっぱいでした」

大森「はい」

金塚「そのあと」

×

×

×

(フラッシュ)

電車が揺れて、金塚が亜矢子の顔を
見る。

×

×

×

金塚「苦しいというのを耐えてる、嫌だとい
うのを抑えてる。そういう表情で」

瀬川「耐えているって表情でわかるんです
か」

坂崎「え？」

金塚「そう見えたんです……そしたらなんで
か、自分の手を抑えるように、犯人の腕つ
かんでました」

金塚の膝で握られた右手。

○同・面談室

金塚が書いたリスクマネジメントシ
ートを読む大森。慢性トリガーの場

所に「混雑した電車・駅」、対処として「自転車の利用」、急性トリガ―の場所に「おとなしそうな女性を物色する」、対処として「大森さんに電話」と書いてある。

大森「自転車はいいですね」

金塚「ええ」

大森「ちなみに、電車に乗らなきゃいけない日とかないですか」

金塚「あゝ」

金塚が用紙に書き加えている。

○クリニックの日々のモニタージュ

共同キッチン。包丁を使い、フライパンを振り、鍋にパスタを入れる男たちの手。

食堂。約20人の男性が食事している。

×

×

×

×

×

×

（数日後）ミーティングルーム。ホワイトボードに「性依存症と治療」と書かれ、大森が受診者の前で話している。

×

×

×

（数日後）ミーティングルーム

「自分史0歳〜10歳」という用紙に向かう受診者たち。

○ 亜矢子の会社・面談室

亜矢子の前に菅原恭太（45）がいる。机の上のノートパソコンに2月末のチームのシフト表が表示されている。

菅原「（パソコンを操作し）来週までは昼出勤で、3月5日以降在宅と」

亜矢子「あ、はい」

菅原「ちなみに、一応なんだけど、妊娠とかではないよね」

亜矢子「あ、全然……偏頭痛が」

○西武池袋線・車内（数日後・夜）

乗客は少ない。イヤホンをした亜矢子が表情硬く座っている。

亜矢子のスマホのバイブが鳴り、スマホをアウターのポケットから出す。金塚から「明日猫カフェ行きます」のメッセージが届く。亜矢子の少しほっとした表情。

○金塚の家・金塚の部屋（夜）

スマホのバイブが鳴る。ベッドに入ったままの金塚がスマホを見る。亜矢子から「お待ちしてます！」というメッセージと猫のスタンプが表示される。金塚の顔が緩み、起き上がり部屋の明かりを消す。

× × ×
明るい部屋。金塚、寝ながら大きなおならをする。

○同・台所（朝）

金塚は錠剤を容器から出し口に入
れ、コップの水を飲む。

○丸の内線・ホーム

電車のドアが開く。空いている車
内。乗車する人のなかにサングラス
とマスク、マフラーをした金塚がお
り、まわりに人がいない場所に立ち
両手でつり革をつかむ。ドアが閉ま
る。

○猫カフェ・エレベーター前

エレベーターの扉が開き、金塚が出
てくる。

「保護猫カフェ ひるねこ」の可愛
らしい扉の前で躊躇する金塚。

○同・入口

恐る恐る金塚がドアを開けると、鼻に指をあてる。猫の鳴き声がそこかしこから聞こえる。真つすぐ歩いた先の受付に亜矢子がいる。

亜矢子「あ、いらっしやいませ」

金塚「どうも」

亜矢子「わざわざ、ありがとうございます」

金塚「いや、ひまですから……猫は」

金塚が振り返り部屋を一瞥する。部屋はいくつかの扉で分けられている。

亜矢子「このフロアの猫はまだ人に慣れてないので、扉の向こうでケージに入ってます」

金塚「ほー」

亜矢子「奥の階段を上ると、カフェスペースになっていて、そこで人に慣れた猫たちと遊べます」

金塚「なるほど」

亜矢子「どっち行きます？」

金塚「ちよつと見たあと、コーヒ―を」

亜矢子「あ、じゃああとでお持ちします」

金塚は目の前のルームAに入る。

○同・ルームA

ケージに入った猫たち。ケージには猫の名前や情報が書いてある。

金塚が猫たちをのぞく。

奥に入る猫や覗いてくる猫。

後ろ手にドアを閉めて出てくる金

塚、受付に目をやるが亜矢子の姿は

なく、隣の部屋に入る。

○同・ルームB

ケージの中を覗きながら歩く金塚。

鳴き声の主を探すように金塚がしや

がむと、猫が外を向いて柵に手をか

けている。

金塚は猫と相對する。猫が後ろを向

くとしつぽが切れている。

金塚が立ち上がる。

○同・カフェスペース

猫が5匹、歩き回っている。そのうち1匹は片目がつぶれている。

金塚のほかは、女性客2人が1組。

金塚がクッションに座っていると、猫が横切る。金塚が猫の顔の前に手を伸ばすと、引つかかれる。

金塚「いた」

金塚の右手の平から出血している。

金塚はテーブルの上のティッシュから何枚か出し、血をおさえる。

亜矢子「大丈夫ですか？」

亜矢子はもっていたコーヒーをテーブルに置き、

亜矢子「見せてください」

金塚「あ、全然」

亜矢子「ひっかいちやいましたか」

金塚「ああ、大したことは」

亜矢子「手当します」

亜矢子は金塚を立たせてスタッフルームのほうに誘導する。

○同・洗面台

蛇口から水が流れている。亜矢子の指が金塚の手のひらの傷口周辺の皮膚をつかみ、血をしぼりだす。

亜矢子「痛いですよね」

金塚「まあ」

亜矢子がハンドソープを泡立てて、金塚の傷口にのせて優しく洗う。金塚は亜矢子の顔を見る。

亜矢子は金塚の手のひらを蛇口の下にもちあげる。

亜矢子「グレーと白の子ですか」

金塚「はい」

亜矢子「うるめは怖がりで」

金塚「いや、下手だったんです。さわりかた」

血が混ざった水が流れていく。

○絆創膏を貼った金塚の手のひら

を金塚が見る。

テーブルの前のクッションに座る金塚に亜矢子がコーヒーを持ってくる。

亜矢子「いれなおしました」

金塚「ありがとうございます」

亜矢子「うるめ、連れてきていいですか」

金塚「あ、なんでも」

金塚はコーヒーを飲みながら、亜矢子がうるめを抱きかかえて、金塚のもとに来るのを見る。

亜矢子「うるめです」

金塚「こんにちはー」

亜矢子「さつきはごめんなさい」

金塚「こちらこそ」

亜矢子「金塚さん怖くないよ、いい人だ

よ」

亜矢子がうるめの背中や頭をなでる。

金塚「いい人じゃないですよ」

亜矢子「謙遜してるよ」

金塚「背中あたり、ですかね」

亜矢子「ですね」

金塚がうるめをなでるがすぐやめる。

金塚「かわいいですね」

亜矢子「かわいいです」

金塚「……下にしっぽが切れている子がいましたね」

亜矢子「ああ、カンタかな」

金塚「あそこに目が片方ふさがってる子も」

亜矢子「ミドリはけっこう長いです。もらってくれる人がいなくて」

金塚「つらくなりますね」

亜矢子「ええ。それでも、来た時より、身体も人への信頼も回復してます」

金塚「ああ」

亜矢子「そういう過程を見るのは、うれしいです」

金塚「……（右手見て）手当してもらいましたけど、してまずけど」

金塚はコーヒーをぐいと飲む。

金塚「志田さんはしてもらってますか、手当」

亜矢子「手当」

金塚「こないだ、傷ついたと思います」

亜矢子「……はじめてじゃないですし」

金塚「でも」

亜矢子「助けてもらって」

金塚「それはもうよくて、餃子なんて変だし、何してるんだか」

亜矢子「美味しかったです」

ジャンプして日当たりのいい台の上に乗る猫。女性客と猫じゃらしで遊

ぶ猫。

亜矢子「猫になりたいなーと時々思います」

金塚「どじょうになりたいなーと思います」

亜矢子「どじょう？」

金塚「飼ってるんです」

亜矢子「へー」

金塚「そんなに食べずに生きていけるんです」

亜矢子「いいですね。なんて名前ですか」

金塚「名前は、ないですね」

亜矢子「え」

金塚「どじょうって名前つけなくないですか」

亜矢子「名前を呼ぶと仲よくなれます。かわ

いくもなります（うるめとじやれる）」

金塚「名前か」

亜矢子「うるめ」

金塚、亜矢子を見つめる。

亜矢子「猫になったら、なでてくれますか」

ぐいと飲み干されたコーヒーカップ

がソーサーに置かれる。

○丸の内線御茶ノ水駅・改札前（夜）

金塚が立っていると、亜矢子がくる。

亜矢子「お待たせしました」

亜矢子はICカードで金塚は切符で改札を通る。

○同・ホーム（夜）

金塚と亜矢子が先頭方向に歩く。まもなく電車が到着するアナウンス。

亜矢子「……最近、通勤やめようかと」

金塚「ああ」

電車が駅に入ってくる。

亜矢子「在宅にできそうなので」

金塚「え？」

亜矢子「あ、在宅に切り替えます」

金塚「（首を振り）聞こえない」

亜矢子「（金塚の耳元で）在宅で仕事しま

す」

金塚「（亜矢子の耳元で）在宅（亜矢子う

なづく)。乗らない方がいいですよ、満員電車は」

亜矢子「……（金塚の耳元で）乗れなくなっちゃったんです」

金塚と亜矢子は見つめ合う。電車の扉が開く。電車内は座席が埋まっており、立っている人がちらほらいる程度。

亜矢子「あのくらいなら」

金塚と亜矢子が乗車する。

○丸の内線・車内（夜）

金塚と亜矢子がドア方向を向いて立っている後ろ姿。

亜矢子「何してました」

金塚「ふらふらと」

亜矢子「いいですね」

金塚「明日も猫カフェ？」

亜矢子「明日は休みです」

金塚「いいですね」

暗い窓に映る金塚の姿。

○御茶ノ水駅周辺（金塚の回想・夕）

とぼとぼと歩く金塚。予備校から出てくる学生に目を力なくやる。

○人家の通りの自販機前（金塚の回想・夕）

金塚は水を買う。

金塚は菓を1錠出すも躊躇する。水を飲み、菓を指で弾く。

○丸の内線・車内（夜）

暗い窓に亜矢子が映って、こめかみをさすっている。

金塚「降ります？」

亜矢子「大丈夫です」

電車が本郷三丁目駅に着き、ふたりの後ろに乗客が少し増える。亜矢子は隠れるように金塚の前に背を向けて立つ。

亜矢子「邪魔ですね」

金塚「いや」

電車が発車する。金塚は亜矢子の後ろ姿を見る。

亜矢子「安心です」

金塚、顔を上げ正面を見る。窓に映った金塚を亜矢子が見ている。金塚は羞恥し、

金塚「混んでるの、自分も苦手で」

亜矢子が振り返り、金塚と向き合う。
う。

亜矢子「同じですね」

金塚は亜矢子から視線を逸らす。金塚は眉間を抑える。

×
(フラッシュ)

満員電車の中、金塚が右手を亜矢子の臀部に近づける。

×

×

×

金塚がマフラーを外しコートの前のボタンを外し、ソワソワする。

亜矢子「大丈夫ですか？」

○後樂園駅のホーム（夜）

電車の扉が開く。過呼吸気味の金塚が降り、マフラーを落とし、ベンチに伏せる。亜矢子が降りてマフラーを拾って近づき、

亜矢子「水、買ってきます」

金塚が首を振る。

金塚、少し呼吸を落ち着かせてからリュックからペットボトルと薬を出して飲む。荒い飲み方で水が口元からこぼれて服がぬれる。

金塚「（自分をペットボトルで差し）汚い人

間」

亜矢子「え」

金塚「あ、ごめん、あ」

亜矢子「汚くないですよ」

金塚「言っていないだけ」

亜矢子「汚くないですよ」

金塚、視線を亜矢子からそらす。

亜矢子「座りますか？」

金塚「……まだ、これで」

亜矢子「はい」

金塚「……一人で、帰る、歩いて」

亜矢子「歩く」

金塚「（上体を起こし）明日も明後日もなん
もない」

亜矢子はバッグからハンドタオル出

して、金塚の濡れた服をぬぐい、

亜矢子「受け止めるのは、割と得意です」

金塚「……」

亜矢子「ギョーザでも食べますか」

金塚「（立ち上がり）見られたくない」

亜矢子「え」

金塚「（歩き出し）一人がいい」

亜矢子「（追いかけ）いっしょ歩いても」

金塚「猫は嫌いだ」

亜矢子「……」

金塚「ボランテアも嫌いだ」

亜矢子「（回り込み）じゃあなんで来たの」

亜矢子は持っていたマフラーを金塚

に差し出す。金塚が掴むと亜矢子は

手を離さず、

亜矢子「怖いんですか？　怖いから、ひっか

くんですか」

金塚は亜矢子の手からマフラーを引

き離し、

金塚「……この前拘置所から釈放された。半

年前痴漢で捕まった。電車の中で何人もさ

わってた」

亜矢子が固まる。

金塚「もうしないし、してない。でも、汚い

人間……痴漢なんだ」

亜矢子が呆然と佇む中、金塚はいた

たまれぬ様子で階段を上る。

亜矢子「……なんで助けたんですか」

金塚が振り返る。

金塚「嫌がってる顔を見て」

亜矢子「……顔に出ない人は……さわっていいんですか」

金塚「……だめに決まってる」

亜矢子が金塚に背を向けホームを歩いていく。

○同・男性用トイレ（夜）

金塚、個室に入りドアを閉めて鍵をかける。もう1つの個室は使用中。

○同・男性用トイレ個室（夜）

金塚は便座に座る。両目を両手の平でおさえ、貧乏揺すりする金塚。

金塚がドアにあるフックに目をやる。金塚は立ち上がり、

×

×

×

（フラッシュ）

金塚は頭を振りかぶり、ドアフック
におでこを思いつき打ちつけよう
とする。

×

×

×

金塚が両手をドアにつけ、ドアフック
を見ている。隣の個室から、大き
なおならが聞こえる。金塚はドアフ
ックにマフラーをかけ、便座に腰を
下ろす。

○坂本クリニック・ミーティングルーム（2

日後・朝）

イスに座ってうつむく金塚。

佐伯「……いやー、大変だったね」

大森「電話してください。しそうになつたと
きだけじゃなくても」

金塚「ああ、はい……」

浜口「でも……言ったのはすごいね」

坂崎「……僕なら言えないです」

金塚「変になっただけで」

佐伯「ちなみに、薬は飲んでたの」

金塚「あー」

大森「ここでは議論はしても否定はしませ
ん」

金塚「……夜は飲んでないです。副作用を避
けたくて」

佐伯「ああ」

大森「女性の立場を想像するとどう思います
か？」

坂崎「……ショックだと思います。助けてく
れた人が、してたのは」

瀬川「でも、金塚さんは彼女にはしてないわ
けだから、そこまで悪く思っていないんじや
ないですか」

金塚「より怖くなったと思います、自分や男
は信用できないと」

佐伯「気になっちゃった。彼女をその痴漢し
ようとしてたっていうのは伝わってる？」

金塚「それは言っていないですけど……なんと
なく伝わってるかもしれません」

佐伯「それはー、うーん、なるほど」

大森「……ほか、女性がわに立つと見えなくなるものないですか」

浜口「そのあと、なにするかでいうと」

大森「はい」

浜口「まだ、クリニックに通って更生しようとしてると伝えたほうが、まだ」

金塚「言い訳じみてませんか？」

浜口「でも、変わろうとしてると伝えないと、裏切られたで止まってしまおう」

金塚「ああ」

浜口「うちは、それで離婚しないでいてくれるっていうのはある」

瀬川「彼女がはじめてじゃなく今回の被害で満員電車乗れなくなったのは、なんでですかね」

大森「被害の大きさ、被害当時抱えていたストレスによりダメージは変わってきますね」

瀬川「そうですか」

大森「あと、これはデータですが、性被害にあつたあと、親しい男性からでも触られる、あるいはセックスに対して拒否反応を示す方は多いです」

金塚「……」

大森「もちろん関係性、個人差はありますが、菓飲まないってなったとき、そういうことを考えました？」

金塚「いや、まったく」

大森「今度、女性の看護師にも参加してもらいましょう」

考え込む男たち。

F M ラジオの音が先行し――

○ 亜矢子の住むマンション・リビング（夜）
スマホから F M ラジオと外からは雨の音がする。

亜矢子は会社で使っていた大きなパソコンで作業している。

かべのへりに物干しハンガーがかか
つており、ほかの洗濯物と一緒にハ
ンドタオルも干されている。

部屋のチャイムが鳴る。

配達員 「宅急便です」

亜矢子がドアスコープをのぞくと、
配達員の恰好をした藤山の顔が見え
る。亜矢子は恐怖の表情で固まる。
再びチャイムがなる。

配達員 「お届け物です」

ドアスコープに映るのは藤山ではな
く配達員の男である。

鍵を開ける音。

○同・台所（夜）

亜矢子が開いた冷蔵庫に段ボールの
中身——タッパに入った凝った料理
やパウンドケーキをつめていく。

冷蔵庫が閉まる。

亜矢子の声 「届いたよ、ありがとう」

志田さつき（53）の声「夜はいると思っ
て」

○同・リビング（夜）

亜矢子がスマホで話しながら、物干
しハンガーの洗濯ばさみをつまみ、
洗濯物を床に落としていく。

さつきの声「でも、身体に悪そう、一日家
で」

亜矢子「散歩するよ」

さつきの声「ケーキもあつたでしょ」

亜矢子「あー、ほんと料理好きだよね」

落とされたハンドタオルは洗濯物に
埋もれて見えなくなる。

さつきの声「一緒に食べる人いないの？」

亜矢子「いないよそんなの」

がさつという音。亜矢子が台所を見
に行くと、部屋の隅で積まれたゴミ
袋が崩れている。

大小のビール缶のゴミのほか、グレイのコートやスカートが燃えるゴミといっしょに入ったゴミ袋。

さつきの声「どうかした」

亜矢子「なんでもない」

○西池袋通りく目白通り（夜）

雨の中、金塚が自転車をこいでいる。

○金塚の家・廊下くリビング（夜）

風呂上り姿の金塚がリビングに入る
と、ソファに座った実と弓子がビール片手にテレビを見ている。

金塚は冷蔵庫を開け、お茶をとろうとするも、大量の缶ビールが目に入り1本出す。

○同・金塚の部屋（夜）

金塚は缶ビールを飲みながらスマホを見る。金塚が亜矢子に3時間前に送ったメッセージ「先日は大変申し訳ありません。混乱や恐怖を与え、傷つけてしまったと思います」「現在は性依存症を治療するクリニックに通い、再犯の防止に努め、自分がしたとり返しのない罪に対してどう償うことができるか考えています」は既読だが返信はない。

金塚は缶ビール片手にバスタオルを頭に乗せ窓を開ける。小雨が降っている。金塚は手を出し、雨の感触をたしかめて振り返り、

金塚「こさめは？」

金塚が水槽に近づき

金塚「こさめと呼ぼう。こさめ」

どじょうの顔。缶ビールを飲む金塚。

金塚「水の中、苦しくないか？」

どじょうの目。

雑踏と電車が開く音と駅員の笛が混じりあう音。

○駅のホームへ電車内（金塚の回想）

高校生の金塚の目。金塚が満員電車に押し込まれている人を軽蔑した顔で見ている。

×

×

×

電車内にスーツを着た金塚がいる。金塚はホームから満員の車内を軽蔑した顔で見ている学生に気づく。金塚は目を伏せる。

○金塚の部屋のベッド（金塚の回想）

金塚と女が抱き合っている。金塚は不器用に女の身体をさわり口づけるも、やがて疲れた様子であおむけになる。女は金塚に背を向けて寝る。金塚は沈んだ顔で股間をまさぐる。

○予備校・教室（金塚の回想／イメージ）

20人程度のクラスで金塚が講義を
している。学生たちは金塚を見てい
ない。

板書をした金塚が振り返ると、学生
は全員女性に変わっており、金塚を
見下した顔で見ている。金塚のおび
える顔。

○電車内（金塚の回想）

スーツを着た金塚が、若い女性の臀
部を指でさわっている。
窓の外は真っ黒で誰も映っていな
い。思い切り息を吸いこむ音――。

○金塚の部屋・水槽（回想戻り・夜）

こさめが水面に出て呼吸する。
水中に戻るこさめ。水槽越しの金塚
と泥のなかのこさめ。

○京急本線浦賀行き（数日後）

品川駅から緩慢な動きで出てくる。

○同・車内

家族連れが多い。カスミソウを膝に置いた亜矢子が座っている。

電車の停車する音。

○平和島ペット霊園・外観

お鈴の鳴る音。

○同・個別納骨堂

火のついた線香、猫の写真の周りに仏具やアルバムやカスミソウが並ぶ。

正座して手を合わせる亜矢子。両側の壁にいくつも設置されたお墓。

×

×

×

ひざを崩した亜矢子。

亜矢子「最近、150円のギョーザ食べたよ。お肉入ってた」

亜矢子の手がアルバムをめくる。

亜矢子「いちばんしゃべったの、カスミかもしれないなあ」

カスミが部屋でくつろぐ写真。亜矢子が海を後ろにカスミを抱く写真。

亜矢子「遊ぶと、言葉がたくさん出てくるよね」

亜矢子がカスミの写真を出し、おでこの辺りを指でなでる。

亜矢子は写真をアルバムに戻して閉じる。

○金塚家の冷蔵庫（夜）

ドアが開き、少なくなった缶ビールを手が1本つかみ、ドアが閉まる。

暗い部屋に実が立っている。

金塚「お」

実「いい加減にしろよ」

金塚 「酒強いから」

実 「そういうことじゃないだろ」

金塚 「まだあるよ」

実 「そうじゃないだろ。ぜんぶ親の金で酒まで、なにしてんの」

金塚 「まず、金とかじゃないだろ」

実 「え」

金塚 「痴漢の次はアルコールか、そういうことだろ！」

実 「なんでお前が」

金塚 「金金金金」

実 「だから依存するなっていつてる」

金塚 「そういう生き方でいいのかって、なん
で言えない」

実 「どの立場でいつてんだよ」

弓子がくる。

弓子 「何時なの」

金塚 「公務員が金しか言わない」

実が金塚を掴み冷蔵庫に押す。

弓子 「なんで話さないかな」

実と金塚の動きが止まる。

弓子「なんでこんなときにも話せないかな」

実が金塚の服を離す。

弓子が水切りカゴからコップを2つ

出す。

弓子「わけて」

○同・リビング（夜）

コップにビールが注がれる。

ビールが入った3つのコップ。1つ

の缶。座った3人がビールを飲む。

金塚「あんまビール好きじゃないんだよ」

実「じゃあ飲むなよ」

弓子「何が好きだっけ」

金塚「お酒はそんなに、なんでも」

弓子「……いまはどじょうか」

金塚「こさめって名前」

実「……昔、大阪に行ったとき」

弓子「いつの話？」

実「学生のころ。どじょうを身代わりに川

に放つと、目の病気が治るっていう寺だか
神社あった」

金塚「目は悪くないよ」

実「だから、どじょうの話だろ」

金塚が3つのコップにビールを足
す。

○猫カフェ・カフェスペース（日替わり・

朝）

亜矢子は水の取り換えをしている
と、ミドリの開いているほうの目
に、目やにがたまっているのに気づ
く。

亜矢子は膝の上にミドリをのせ、ク
リーナーでガーゼを湿らせ、ミドリ
の目にガーゼをあて目やにをふやか
す。おとなしくするミドリ。

亜矢子「えらいえらい」

亜矢子は目やにを拭う。

亜矢子「おー、スッキリしたね」

ミドリの顔を見る亜矢子。

亜矢子「……」

ミドリ、亜矢子のひざから降りて足取り悪く歩いていく。

○金塚の家・金塚の部屋

金塚、ベッドで寝ながら大きなおならをする。

金塚がパソコンに向かい、文章を書きつける。

○スマホの音声レコーダーの画面

震える指が録音開始のボタンをタップする。

○坂本クリニック・ミーティングルーム（日替わり）

車座になった参加者たちに交じって木村初美（28）が座っている。

大森「今回は看護師の木村さんにも参加して

もらいます」

初美「よろしくお願いします」

参加者たち「よろしくお願いします」

大森「じゃあ、まず話したい人」

金塚「（手を挙げ）聞いてもらいたいものがあるんですけど、（初美に）前回までのあらずじ話しますね」

金塚が初美に向かって話している。

×

×

×

初美「要は痴漢していたことがばれて、失恋したってことですね」

金塚「大体そんな感じで。で、これを送るかどうか迷ってるんですけど」

金塚がスマホを皆に向け、再生ボタンを押す。

金塚の声「謝りたいと思い、録音します…
あの日、志田さんを痴漢した男を捕まえる前、あの男が手を出す前、自分も志田さんを痴漢しようと思っていました」

受診者たちの表情。

金塚の声「……あの男の手を見たとき、パニックになり、そのあと偶然、志田さんの顔を見ました。それを見てはじめて、自分がしていた暴力を目の当たりにしたと思ったんです。見ないとわかりませんでした。許されない、身勝手なことですが、自分の現実息が詰まり……暴力で自分を慰めていたのだと思います。現実逃避のため、痴漢をし続けていました」

金塚は落ち着かなそうに左手で髪をいじっている。

金塚の声「言われた通り、怖いのです。怖いから、後ろを向いた女性を狙い、怖いから、こないだも逃げようと思いました。拒絶され、軽蔑され、負けるのも怖い」

○金塚の部屋（金塚の回想・夜）

水槽の前に金塚がスマホを口元に近づけ、録音している。

金塚「……大変な恐怖を与え、傷つけてし

まったこと、申し訳ありません」

どじょうと金塚が向き合う。

金塚「そういえば、どじょうの名前を『こ

さめ』にしました。『こさめ』と呼ぶと、

愛着がわきます。教えてくれてありがとう

ございます……それでは」

○坂本クリニック・ミーティングルーム

金塚が停止ボタンを押す。

金塚「これ、どう思いますか？」

初美「最後、なんですか」

金塚「どじょう飼ってまして」

初美「どじょう？」

金塚「ええ。名前つけてなかったんですが、

つけたほうがいいよって言われたので、つ

けたって話です」

初美「……どじょう？」

大森「いったんどじょう置いといて、みなさ

らはどうでしょう」

浜口「どういう目的で送るんですか」

金塚 「謝罪したいのと……また話したいです」

浜口 「いやー、したかったって言っちゃ、難しいでしょ」

金塚 「そうですか」

坂崎 「どう考えても無理ですよ」

佐伯 「そうね、それは」

瀬川 「でも、それ自分可愛さなんじゃないんですか」

坂崎 「は？」

瀬川 「傷つけないほうがいいというのは言い訳であって、自分が傷つかないでいるために」

坂崎 「（バカにしたトーンで）いや普通に。

普通に考えて無理ですよ」

瀬川 「そんな普通じゃないだろ、きみも」

大森 「否定しあうのはやめましょう」

大森と初美、坂崎と瀬川の間に入る。

瀬川 「うそをつかない責任があります」

初美 「真剣なんですネ」

坂崎 「最悪な場合考えないと」

大森 「それは大事ですネ」

金塚はその動きをぼーっと見てる。

初美 「私いいですか」

大森 「どうぞどうぞ」

初美 「看護師としては、ここまで言葉にできたのはいいと思いました」

金塚 「どうも」

初美 「ただ、さっきもありましたけど、これ伝えたら再会はあきらめたほうがいいかも」

も」

金塚 「ああ」

初美 「言われてもって感じで」

金塚 「ええ」

初美 「うわってなっっちゃうか、入ってこない

かも」

金塚 「なるほど」

初美 「ていうか、送ること自体暴力みたいな」

金塚「消しますね」

大森「ちよつと待ってもらって。言語化でき
たのは金塚さんにとってすごいよかったと
思いますし」

金塚「ああ」

大森「あれですか、割と何度もとりまし
た？」

金塚「そんなでも…10回くらい」

佐伯「ちよつと、演技がかったよね」

初美「わかる」

金塚「…」

佐伯「メールじゃだめなの」

金塚「感情が伝わらないんで」

坂崎「自分はすつきりかもしれないけど」

浜口「送る目的が…許されるためなんじゃ
ない」

金塚「ああ」

浜口「許されると思ってはいけないと、よく
ここで聞きますけど」

金塚「隠したままのほうがいいんですか」

佐伯「他人が全部知る必要ないよ」

大森「たとえば、電話だと、相手の声を聴きながら言えること考えられますね」

金塚「（憂鬱そうに）電話か」

大森「どうしても、音声は一方通行なんで」

初美「電話出なかったらあきらめましょう」

金塚「はあ」

大森「言いたいことをただいいうのではなく、聞かれたことに答えるのが大事だと思いますね」

初美「私なら、ガードしてない声が聴きたいです」

男性たちの二の句が継げぬ様子。

○金塚の自宅・金塚の部屋（夜）

金塚が真顔で腕を組みパソコンを見ている。どじょうすくい動画。

金塚「思い切りのよさか」

金塚がスマホで亜矢子宛に「いま電話していいですか」とメッセージを

送信しようとする、机の上のスマホのバイブが鳴る。亜矢子からの着信と表示され、金塚は慌てて机からスマホを落とす。どじょうすくい動画内のおじさんが落としたどじょうを拾い喜んでいる。

亜矢子の声「もしもし」

金塚「（立ったままスマホを耳にあて）はい」

亜矢子の声「夜分すみません」

金塚「いま、電話しようか迷っていたところで（パソコンを閉じる）……志田さんからどうぞ」

亜矢子「確かめたいんですが」

金塚「はい……」

亜矢子の声「被害届を出そうと思うんですが、証言してくれますか」

金塚「あ」

亜矢子の声「いまさらですけど」

金塚「いつでも大丈夫です」

亜矢子の声「ありがとうございます。弁護士さんと連絡とってるので、決まったら警察にいっしょに」

金塚「わかりました」

亜矢子の声「で……なんででしょう」

金塚「あ、えー、どじょうなんですけど」

亜矢子の声「はい？」

金塚「（水槽に近づき）どじょう、こさめつて名前にしました」

亜矢子「あー、かわいいですね」

金塚「こさめは、よくおならをするんです」

亜矢子の声「え」

金塚「どじょうはおならするんですよ」

亜矢子の声「へー」

金塚「どうでもいいですね」

亜矢子の声「猫もしますよ」

金塚「みんなするんですね」

亜矢子の声「ですね」

金塚「うるめやミドリは元気ですか」

○石神井公園駅前のカラオケ内の部屋（夜）

亜矢子はソファに座り、左手でスマホを耳にあて、右手でテーブルに置いたマイクをさわっている。テーブル手前には細かい氷のみが底に残ったグラス。テレビは消えている。

金塚の声「え」

亜矢子「元気ですよ、元気元気」

金塚の声「よかった」

亜矢子「はい」

金塚の声「……僕はその、どうしようもない人間です。とりかえしのつかないことをして、志田さんを助けたようなふりを」

亜矢子「実際それは、助けてくれたじゃないですか」

金塚の声「いや、それはそうなんですけど」

亜矢子「わたしは、助けられませんでしたよ。自分といっしょにいた、カスミっていう猫、助けられませんでした」

金塚の声「え」

亜矢子「前、昔、夜にトイレに立って。そしてたらつきあつてた彼氏が台所で、カスミの口をおさえてカッターで……怖くて動けなかつたんです」

金塚「……はい」

亜矢子「で……カスミの鳴き声聞いて、起きたふりしたんです」

金塚の声「それで」

亜矢子「カッター隠して、その男。カスミ怪我してるよみたいなうそ言って。すぐ、病院に連れて行きました。先生傷見て、カスミをいったん預かってくれました」

金塚の声「……で」

亜矢子「すぐ引越して、その男と別れて。そのあと病院に、つきあつてた人がって説明しました。信じたかわからないけど、けががはじめてだったんで、返してくれました。でも、カスミは10ヶ月後、なくなりました」

金塚「ああ」

亜矢子「……その間ずっと、カスミとわたし、ひんやりした感じがあったまま、もとに戻れなくて。わたしは、そういう、クズです」

亜矢子の水滴がついた右手。亜矢子はおしぼりで右手をぬぐい、マイクにさわる。

金塚の声「……それでボランテアを」

亜矢子「もうやっていたんです。やっていたのに、動けなかったんです。なのに、また猫と住みたいと思ってる、バカです」

金塚の声「志田さんと住んだら、うるめもミドリもよろこびます」

亜矢子「……（隣の空いているソファをじつと見やり）住みたいです」

金塚の声「いいじゃないですか」

亜矢子「傷つける人を止められないと、一緒にいちゃいけないんです」

金塚の声「なるほど」

亜矢子「傷つける人を、減らしたい」

金塚の声「証言します」

亜矢子「たんに、今更腹立ってきたのかもしれない
れません」

金塚の声「被害者なんですから」

亜矢子「すぐ怒れない」

金塚の声「いつ怒ってもいいじゃないですか」

亜矢子、マイクを固く握る。

○金塚の部屋（夜）

金塚は立ったままである。

亜矢子の声「……ぞっとしました。なんで、
なんでしてたんですか」

金塚「……自分をその、自分は軽蔑していて
……怖いんです、生きるのも人も……」

亜矢子の声「そんなの」

金塚「それに目を背けるといふか……痴漢と
いうあれで、慰めたかったんだと思います
自分を」

亜矢子の声「……自分自分自分自分」

金塚「本当に身勝手に」

亜矢子の声「（マイク使い）知らないよ、依存症なんて」

金塚「はい」

亜矢子「馬鹿にしてんだよ、馬鹿にしてるから勝手にさわれるんだよ。こいつらは反抗してこないって、最低の……なんで気持ち、わかんないの？」

金塚「申し訳……」

通話が切れる。

金塚は大きく息をはき、ひざを崩してこさめに近づく。

○ A T M の出金口（数日後）

出された1万円を掴む金塚。残高は70,818円と明細書に表示。

○ 練馬警察署・外観

○ 同・取調室1

亜矢子の隣に弁護士バッジをつけた

中村響子（40）が同席し、三上刑

事（38）が対面している。

三上「何時の電車で被害にいましたか」

亜矢子「（手元のスマホを見て）18時35

分の電車で被害にいました」

三上「被害時刻の客観的な証拠はあります

か」

亜矢子「18時32分に改札を通ったとIC

カードに履歴があります。あと、証言者の

方が」

○同・取調室2

本庄刑事（40）を前にした金塚。

金塚「母親から電話がありました。その時刻

を確認したところ、18時38分だとわか

りました（とスマホを見せる）」

○同・取調室1

三上「具体的にどのような被害でした」

亜矢子「コートの上とスカートの上から臀部を触られました」

響子「被害時に着ていた衣類を証拠品として提出します」

三上「それでは、どのようにさわられましたか」

亜矢子「どのように」

三上「具体的に」

亜矢子「臀部に、急に指がふれるような、不快な感触がありました」

三上「指のような：：実際指は見ましたか」

亜矢子「いえ」

三上「指だと判断した根拠はなんでしょう」

響子「それは主に目撃証言を参考にすることが妥当ではないでしょうか」

○同・取調室2

本庄「被疑者の手はどちらの手でした」

金塚「左手です」

本庄「被疑者の顔はいつ見ました」

金塚「はっきりみたのは、手をつかんで、相手が振り返ったときです」

本庄「では、犯行を目撃して、すぐ止めなかったのはなぜですか」

金塚「パニックになり、動けませんでした」

本庄「パニック？」

金塚「混乱して」

本庄「∴被害者とは以前から知り合いでしたか」

金塚「初対面です」

○同・取調室 1

三上「被疑者が捕まった際、嚴重注意をさせていただきます。いま届を出すのはなぜですか」

亜矢子「それは∴∴当時は恐いという感情が強く、早く終わらせたいと思いました。でも、なかったことにしたくない、次の被害者が出るかもしれないと思うようになり、届けたいと思いました」

○同・取調室2

本庄「調べたところ、執行猶予中ですね」

金塚「はい」

本庄「しかも、痴漢で捕まっています」

金塚「そうです」

本庄「あなたがやってないという証拠は？」

金塚「被疑者が逮捕のとき、犯行を認めています」

ます」

本庄「あなたも、やってないという証拠はありませんか」

金塚「……被害者の方が証拠として服を提出するので、指紋をとってください」

○同・検査室

亜矢子が体重計にのる。

亜矢子は身長をはかる。

亜矢子が股下や手の長さを女性警官に計られる。

亜矢子がDNA検査キットに唾液を入れる。

○同・取調室3

大きな部屋。亜矢子と金塚の指示のもと、マネキンと金塚役と藤山役の刑事が事件を再現する。三上と本庄が調書をとっている。響子は亜矢子の近くにいる。

金塚役の刑事がマネキンの後ろにいる。その右手を金塚が見る。

藤山役の刑事がマネキンの臀部をさわる。亜矢子がマネキンを見る顔。

金塚役の刑事が、電車の揺れたときを再現し、マネキンをのぞく。亜矢子は目を伏せる。

金塚役が藤山役の手をつかんで掲げるのを見る金塚と亜矢子。

金塚役の声「痴漢、痴漢！」

○練馬署前（夜）

亜矢子と金塚が響子に頭を下げあ
う。

響子が駅に向かっていく。

亜矢子「じゃあまた（立ち去ろうとする）」

金塚「あの、2000円あるんでギョーザ、
おごります」

亜矢子、悩まし気な顔。

○中華屋・店内（夜）

瓶ビールとグラス2つ。

亜矢子「……仕事はじめたんですか」

金塚「するわけないじゃないですか」

亜矢子「半分出します」

金塚「いいですいいです」

亜矢子「借りになっても嫌なんで」

金塚「いやー、お疲れさまでした（飲む）」

亜矢子「……今日みたいの、何回かあるみた
いですね」

金塚「志田さんは、大変だったでしょう」

沈黙。

亜矢子「……いまは、どんな感じですか」

金塚「相変わらず、クリニックに通ってます」

亜矢子「どんなことしてるんですか」

金塚「まあ、最近のことを振り返って話したり、危険なときを自覚するため対策を書いたり」

亜矢子「へー」

金塚「（醤油さしに醤油・辣油・酢を入れつつ）最初は再犯しないために策を立てるんです。そのうち、犯行の理由を言語化できるようにして、で偏った思考を修正していきます、最終的に償い方を考えていくっていう

3段階で」

亜矢子「どうやって償うんですか」

金塚「……それは、まだ」

店員「はい、焼き餃子（餃子10個置く）」

亜矢子「（餃子を食べ）……あつあつです」

金塚「償えないですけど、なにかしたいと」

亜矢子「効果（飲み込み）、あると思います」

か、クリニック」

金塚「ええ。罰だけで治すなんて無理です」

亜矢子「罪悪感、ないんですか」

金塚「ありますけど……その自己嫌悪の苦し
さから逃れるため再犯というパターンもあ
ると聞きます」

亜矢子「あー、面倒くさい」

亜矢子、皿に残る最後の餃子を食べ
てビールで流し込む。

○藤山の自宅・リビング（数日後・朝）

藤山が藤山一真（5）と藤山優美

（38）と朝食を食べている。

藤山「週末、行きたいところある？」

一真「東京駅」

優美「また？」

一真「新幹線みたい」

藤山「トマト食べない子は連れてけないな」

一真、自分の皿のトマトをはしでつ
かみ、口に入れる。

藤山「えらい！ 行こか、ね」

一真「新幹線！ 新幹線！」

藤山「俺連れてく。たまには友だちとご飯でも行つてきなよ」

優美「ありがとう」

○小手指駅のホーム（朝）

藤山が笑顔でホームに立つ。

○西武池袋線急行・車内（朝）

混雑した車内。藤山がおとなしそうな女性の臀部を指でさわっている。

藤山M「サービスサービス」

○カフェ・レジ（朝）

藤山がレジに入ってる。高齢の女性客が来て、

藤山「いらっしやいませ。あ、いつもありがとうございます」

○同・バックヤード

藤山がパソコンでシフトを作成して

いる。春山祥子（21）がきて、

藤山「ああ、お疲れ」

祥子「すいません、来週の水曜ライブが入っ

ちゃって」

藤山「（大げさに）まじかー」

祥子「探したんですけど、変わってくれる人

いなくて」

藤山「じゃく、俺入るよ夜も（4月4日夜の

春山のシフトを自分に替える）」

祥子「ほんとすいません」

藤山「しようがないそれは。一度ね、みんな

で見たいって話してるんだけど」

祥子「ぜひぜひ」

○西武池袋線急行・車内（夜）

満員電車。藤山が女子高生の臀部を

手の甲と手のひらでなでている。

藤山M「今月、サービスすぎか？」

○小手指駅・トイレ個室（夜）

藤山が手帳をひろげ、正の字を足す。計15。

○藤山のマンション（夜）

エレベーターから藤山が出てきて、自宅のドアを鍵で開ける。玄関に革靴が2組ある。三上と本上が現れ、

三上「（警察手帳を見せ）練馬署です。迷惑防止条例違反の容疑で任意同行をお願いします」

奥で視線を避けている優美。藤山を見ようとする一真。

○中華屋・店内（数日後）

亜矢子と金塚、餃子を食べている。2人の服装が少し春めいている。

金塚「いくらですか」

亜矢子「30万です」

金塚「よくある額ですね」

亜矢子「そうらしいですね」

金塚「でも、示談断るんですね」

亜矢子「……受けようかと」

金塚「え！」

亜矢子「こないだ話しましたが、医療を受けることを示談の要求として加えようかと」

と

金塚「え？」

亜矢子「弁護士さんに相談したら、そういうのもできると」

金塚「どうなんでしょうね」

亜矢子「だって、罰を受けても大体再犯するんですよ」

金塚「再犯率は性犯罪で一番高いです」

亜矢子「なら、病院行ってくりかえさない確率を高めるほうが、希望がもてます」

金塚「あいつに罰がないのモヤっとしますけどねー」

亜矢子「でも、初犯扱いだから、有罪なつて

も刑務所でそういう治療？ 受けるほど重
罪にはならないと思うし」

金塚「まあ、志田さんが納得できるなら」

亜矢子「意外に、賛成してくれなかった」

金塚「……あ、最後どうぞ」

亜矢子「半分こ、しますか」

亜矢子が新しい箸を出し、半分にする。
あふれる肉汁。

○坂本クリニック・外観（2カ月後）

滝のような雨が降っている。

○同・診察室

坂本医師が金塚を見て、

坂本「服薬は続けてますか」

金塚「ええ」

坂本「半年は様子を見たいので、もう3か月は続けてみましょう」

○同・調理室（夜）

金塚が豆腐を手の上でさいの目に切っている。

○同・食堂（夜）

受診者たちと麻婆豆腐を食べる金塚。

佐伯「……どうなったの、あの子とは」

金塚「どうにもなってないですよ」

浜口「どうにかなってたらすごいね」

坂崎「どういう関係なんですか」

金塚「どうって……たまたま餃子を食べに行く

関係？」

瀬川「いい、その関係、いい」

金塚、麻婆豆腐を食べる。

○同・外へ通り（夜）

雨はすっかり止んでいる。

金塚は道を歩くが、大通りに出る前に何かに気づいた様子で引き返す。

○同・入口前（夜）

金塚は傘立ての中からビニール傘を
何本か出したうえ、傘を1本選ぶ。

金塚がエレベーターの下ボタンを押
して待っていると、エレベーターが
開き、中から傘をもった藤山が降り
てくる。二人、身じろぎもしない。

金塚「なんで」

藤山「示談で、被害者の方から提案が」

金塚「ああ」

エレベーターは閉まり、上昇する。

藤山「えっと」

金塚「同じです、治療を受けてます」

藤山「え？（平穩を装い）ああ、そうだっ

たんですね」

金塚「（スーツ姿見て）仕事帰り？」

藤山「ええ。わたしは夜のプログラムに」

金塚「ああ」

藤山「時間なので、失礼します」

藤山が傘立てに傘を差し、受付に向かうのを怪訝そうに見る金塚。

○同・外（夜）

金塚が大森に電話する。

大森の声「もしもし」

金塚「お休みの日にすいません」

大森の声「いまどこですか」

金塚「違って」

大森の声「しゃがみましよう、息をはいて」

金塚「あの、したくなってないです」

大森の声「え？　いま場所は」

金塚「信じてないでしょ」

大森の声「いや、どうされました？」

金塚「あの男が、志田さんを痴漢した男とク

リニックで会ったんです」

大森の声「えっと、金塚さんが捕まえた？」

金塚「そうです。夜のプログラムに通ってる

みたいで」

大森の声「え？」

金塚「どうなってんですか」

大森の声「クリニックにいるってことですか」

金塚「そうですよ。おかしくないですか」

大森の声「まあ、性依存症専門のクリニックは東京でここだけですし、事件の日もですが、池袋、通勤で使ってるのか」

金塚「分析するとそうかもしれないけど」

大森の声「あ、すみません。それはびっくりですよね」

金塚「びっくりだし、おかしいでしょ」

大森の声「スタッフと話してみます」

金塚「気持ち悪いんですよ。傘も無駄に高そうで」

大森の声「金塚さんの気持ちはわかりました。スタッフと相談しますので」

金塚「じゃまた」

大森「金塚さん？」

金塚、クリニックを見上げる。

○池袋駅・ホーム（夜）

藤山が並んでいるのを、マスクをした金塚が見ている。

○西武池袋線飯能方面・車内（夜）

席は埋まっているが、過密なほど乗客は混みあっていない。

藤山は後ろに窓のない席に座り、スマホを操作している。金塚は少し離れたところに立ち、藤山を見ている。藤山が時折車内を見ると、金塚は目を伏せる。

×

×

×

小手指駅で藤山が下車するのを、金塚が見る。

○亜矢子の家・台所（日替わり・夜）

ゴミ袋がたまっていたスペースがきれいになり、ミドリが寝ている。

さつきの声「外出てる？」

亜矢子「運動してるよ、適度に」

亜矢子がリビングにいるうるめのもとにいき、猫じゃらしで遊ぶ。

さつきの声「そうそう、こないださ、亜矢子の高校で同じだった鈴木くん、あの子から電話きたよ」

亜矢子「え」

さつきの声「同窓会やるんだって。亜矢子の住所がわからないから、教えてほしいって」

亜矢子「え、教えてないよね」

さつきの声「え、いけなかった？」

亜矢子「なんで教えるの」

さつきの声「鈴木くん、覚えてるもんわたし」

亜矢子「言ってるだけかもしれないじゃん。

え、信じらんないんだけど」

さつきの声「そんな怒る？」

亜矢子「まあ実家の電話はわかんないか」

さつきの声「なに、なんかあったの」

亜矢子「もういい、いい」

さつきの声「……いつもなんも言わないね。

いっつも普通とか、別にとか」

亜矢子「だって住所もすぐ教えるし」

さつきの声「そんな信用できない？」

亜矢子「……お母さんきれいだから、話しづ
らい」

猫じやらしを噛むうるめ。

○金塚の家・金塚の部屋（夜）

金塚がこさめに餌をやっている。

金塚「けっこう大きくなったね」

金塚のスマホが鳴り、スマホを見ると亜矢子からの通知で「一応知らせます。引越します」。「母親が同窓会の案内送りたいと名乗る人に、現住所教えてしまったらしく」「起訴したとき、名前は知られてますし」「示談金引越しです」とある。

金塚は「了解です。それは不安ですね」 「引越す前に、よかったら餃子食べに行きましよう」と返信。

○坂本クリニック・面談室（日替わり・朝）

大森と金塚が向かい合う。

金塚「……あの男、仕事も続けてるらしいんですよ」

大森「そんな、悪いことのように」

金塚「クリニックの方針に反してるんじゃないんですか」

大森「重症度は医師の診察で判断して、それに沿ったプログラムをみなさん受けてます」

金塚「とにかくね、うそくさいんです」

大森「わかりました。藤山さんも通いづらいかもしれないし、一度話して別のところに通えるかなど相談します」

金塚「なんか墓穴掘ったな」

大森「通わないほうが危険だと思います」

ん？」

金塚「そりゃそうですけど」

大森「だし、そういう目で見られたら、金塚

さんも追い詰められますよね」

金塚「伝わらないなく、あの感じ」

初美の声「では、代読します」

○同・ミーティングルーム

受診者たちが正面を向いて座り、初

美が手紙を持って立っている。ホワ

イトボードに「被害者からの手紙」

と書かれている。

初美「わたしは現在32歳の女性です。主に

痴漢の被害に遭っていたのは中学生のころ

ですが、被害について話せるようになった

のは私が大学生になった後のことです。言

葉は怒りとともに沸いてきましたが、みな

さんにそれについて語りたいと思いません

ん」

受診者たちが聞いている表情。初美

が手紙を淡々と読む様子。

初美「今日は、はじめて痴漢被害にあった日をただ綴り、実際私の身に起きたことを知ってほしいと思います。12歳のときです。電車で通学をはじめ3カ月目の6月の朝でした。学校までは地下鉄から山手線に乗り換え、3つ駅を我慢すればいいのですが、私は伸長も低く、乗客の間にあつという間に埋もれます。当時わたしは規定どおりの長さのスカートを履いていました。その朝、その上を、もぞもぞとはってくるものがゆっくり腰からお尻に落ちてくる、そういう気持ち悪さに襲われました。虫が入ってきてしまったのかと一瞬頭をよぎりましたが、それは執拗にお尻をなでてきました。なにかわからず混乱したまま、下半身に冷気を感じました。スカートがめくられてきたのです。それは下着の上をはいまわりました。誰かに助けてほしいのに自分の声がどこかにいってしまったようです。恐

怖で固まり、恐怖に逃げました。そして、それは逃げるどころか、下着のなかまで入ってきました」

坂崎の顔。

初美「痛い」と脳が叫びましたが、言葉になりません。痛いのは性器を引っかかれているからです」

浜口の顔。

初美「痴漢は最初、痴漢だとわかりません。被害者に経験がないからです。それは私にとって突然にお尻と性器を強引に気持ち悪く、痛めつけた6分間です」

佐伯、瀬川の顔。

初美「しかし、わたしにとっては、いまだに最も長い6分です」

金塚が自分の手を見る。指は大きな

蜘蛛が歩くよう見える。

初美「これがわたしの中に長年埋めていた、忘れ去りたい最初の記憶です」

○西武池袋線飯能方面・車内（夜）

席は埋まっているが、さほど混雑していない。

藤山は後ろに窓のない席に座りスマホを操作している。マスクをした金塚は少し離れたところに立ち、藤山を見ている。

×

×

×

電車が石神井公園駅に着くと、藤山は降り、続いて金塚も降りる。

○石神井公園駅・ホーム（夜）

藤山は隣の車両に再び乗る。金塚は慌ててもとの車両に戻る。

○西武池袋線飯能方面・車内（夜）

金塚は藤山が座りスマホを操作しているのを連結部のドア越しに見る。藤山が向かい側に座りスマホを見せて合う女子高生２人組をチラチラ見て

いる。女子高生2人の顔がひきつり、1人はスマホをしまい下を見て、もう1人は周囲をうかがう。藤山が女子高生をのぞき見ている様子を金塚は見る。

×

×

×

電車がひばりが丘駅に着き、乗客が入れ替わる。

発車して乗客が座席に着きしばらくすると、藤山が画像を選択しエアドロップ共有画面を見て近くの女性ユザーに送り付ける。スマホで写真を撮る音。藤山が振り返ると、斜め後ろに金塚がいる。

金塚「痴漢」

金塚が藤山の手をつかむが、藤山が抵抗して金塚は倒れる。藤山は隣の車両に逃げる。

金塚「痴漢！」

金塚の周囲の乗客は誰も動かない。

金塚は藤山の後を追う。

×

×

×

先頭車両は席が半分ほど埋まっている。藤山が先頭まで逃げ、金塚が迫いつき、

金塚「あんたのチンコだろ」

藤山が振り返る。金塚がスマホをかざし、

金塚「違うのか」

藤山「なんなんだよ」

金塚「疲れた（座席に座る）……警察いこう」

藤山「……（膝を折り）今度、息子と今度、東京駅に」

金塚「いないほうがいい、痴漢のお父さんは」

藤山「え」

金塚「どうせ家族サービスもストレスなんでしよ、あんた家族向いてないよ」

藤山「……冷たいな」

金塚「は？」

藤山「あんたも同じだろ」

金塚「終わりにしよう、被害者がいるから」

藤山「え？」

金塚「傷ついているの、俺らはわからないけど」

藤山「傷つく」

金塚「見えてないんだよ」

藤山「見えてるよ、見てたろ。だから気づいた」

金塚「……」

藤山「見たよ、志田ちゃんが傷つくのも。見たいんだよ」

金塚が立ち上がり、藤山につかみかかるが、藤山は押し返す。

藤山「サービスサービス！」

金塚「え？」

藤山「痴漢は自分へのサービス」

金塚「いや、痴漢は暴力」

藤山「いや、暴力はあんただろ」

金塚が振り返ると、乗客の多くは隣の車両に移りスマホをかざす者もいるが、固まった様子で動けない人や震えている人もいる。

金塚「……次で降りよう」

藤山「ああ！（指さして）わかった、やれないからだ」

金塚「は？」

藤山「俺痴漢してなかったら、がっかりしたろ」

金塚「なに？」

藤山「したいのにやれないから、してるやつを捕まえてスッキリしたい」

金塚「……」

藤山「（大声で指さし）歪んだインポだ」

金塚、藤山に殴りかかる。揺れる車内で互いに殴り合い、藤山はスマホで金塚の顔を殴る。スマホが金塚の左目に入り込む。金塚は左目を抑え

るも出血する。車内に悲鳴が起きる。藤山は手すりに何度もスマホを叩きつける。

○ 駅のホームと階段（夜）

藤山が電車を降りて階段を駆け上がり、駅員が現れ取り押さえる。

○ 亜矢子のマンションの前（日替わり・朝）

亜矢子が郵便受けの中をとる。「北川高等学校同窓会のご案内」と封筒に記載がある。

○ 亜矢子のスマホの画面（朝）

「同窓会の知らせ来ました！」「餃子行きますか」と金塚に向けてのメッセージが送ってあるも未読状態。

○ 坂本クリニック・ミーティングルーム

車座になった男たち。

大森「聞いてると思います。金塚さんが昨日逮捕されました。執行猶予中なので……犯人を捕まえようとしての行為ですし、不起訴になる可能性もありますが」

坂崎「いまは病院ですか」

大森「はい。左目が、まだ見えないらしく」

佐伯「……どうして二人、引き離さなかったんですか」

大森「それは……わたしたちの、わたしのミスです。対応が完全に遅れました」

浜口「治療は罰とセットじゃないと」

瀬川「でも、金塚さんは、1人捕まえて、何人か助けたんですよね」

参加者たちの沈黙。

○金塚の家・リビング（夜）

弓子がソファに実がイスに座っている。二人はビールが入ったコップをもっているが手を付けた様子はない。

実 「……大阪の、寺か神社行こうか」

弓子「（ビールを飲み）犯人、殺したいと思
っちゃうね」

実はビールを少し飲む。

弓子「あの子の被害者の親だって、あの子を
殺したいだろうけど」

弓子が一気にビールをあおり、数秒後
大きな音でゲップをする。

○病室・個室（数日後）

しとしと降る雨の音。白い天井が薄
ぼんやり見える。

ノックの音がして亜矢子が部屋に入
ってくる、金塚は上半身を起こ
す。亜矢子は金塚の左目が痛々しく
ふさがれているを見る。

亜矢子「こんにちは」

金塚「ああ、すみません。なんて言ってい
かわからず、連絡遅れ」

亜矢子「はい」

金塚「……あ、引っ越しは」

亜矢子「近いうち」

金塚「やっぱりするんですね」

亜矢子「更新も近かったの。あ、こさめ？」

亜矢子が金塚の横のテーブルの水槽

に近づく。

金塚「親にもってきてもらいました」

亜矢子「こさめく、大きいね」

金塚「……聞いた話、大阪のほうに、どじょうを身代わりに川に放つと、目の病が治るってお寺があるらしいんですよ」

亜矢子「身代わりにしますか」

金塚「いや、もう、こさめですからね」

亜矢子「……捕まえてくれたこと、被害者の女子高生も感謝してると思います」

金塚「どうでしょうね」

亜矢子「『被害者の女子高生』にも、名前あります」

金塚「……あの、実は最初会ったとき、電車
で」

亜矢子「（割って入り）いま一番、何がした
いですか？」

金塚「……手を握りたい」

亜矢子「……」

金塚「志田さんと（手をかざす）」

亜矢子は金塚の手をつかむ。それは
優しくというより硬い握手で、数秒
の後に2人の手は永遠に離れた。

（了）